

アウグスティヌスにおける聖書解釈と愛の概念

佐藤 真基子

アウグスティヌスは、聖書解釈という営みにいかなる意義を見出していたのか。この問いを明らかにするために、本稿では『キリスト教の教え』(De doctrina christiana) 第一巻の議論を中心に検討する。『キリスト教の教え』は、『告白』とほぼ同時期に執筆が開始された著作である¹⁾。本著作においてアウグスティヌスは、聖書解釈の方法を論じている。聖書解釈を二つの方法に分け、聖書解釈において理解されるべきことを見出す方法についてはじめに論じ、理解したことを説明する方法について後で論じるという本書の構成が第一巻冒頭において説明されている。そして『再考録』で言われているように、第一巻から第三巻は前者の議論に、第四巻は後者の議論に充てられている。理解されるべきことを見出す方法についての議論はさらに、事物(res)についての議論と記号(signa)についての議論に分けられ、第一巻では事物について論じると冒頭で宣言されている。しかし、記号と区別した上で事物について論じると宣言したアウグスティヌスの意図は一見不明である。というのも、事物について論じるとしながら、じっさいには、神を愛し隣人を愛するべきであるという議論に終始しているからである。一般に、解釈する行為と愛する行為とは、端的に結びつけて考えられるものではないであろう。それではなぜアウグスティヌスは、聖書解釈の方法を論じることを意図しながら、愛について論じているのか。記号と区別した上で事物について論じるという構成をとりながら愛について論じる彼の意図を明らかにすることによって、アウグスティヌスが聖書解釈という営みに見出している意義を探る。

I 事物と記号

アウグスティヌスは、「すべて教えは事物か記号に属するが、事物は記号を通して学ばれる²⁾」と述べ、教えと学びのあり方を事物と記号の概念を用いて説明すること

から議論を始める³⁾。そして、事物とは「何かを指示するために適用されない」ものであり、記号とは「何かを指示するために適用される」ものであると説明する⁴⁾。そして事物の例として木や石を挙げ、記号の例として聖書の比喩表現における木や石、また言葉そのものを挙げています。この例にしたがえば、言葉「木」を通して木が理解されるべきとき（いわば文字通りの表現のとき）言葉「木」は記号であるが、木は理解されるべきものであり、事物である。だが、木ではなく何か別のものが理解されるべきである「モーセが投げた木」といった表現においては、言葉「木」と同じく木も記号である。それは、まず言葉「木」を通して木が理解され、さらに木を通して別のもの（例えば十字架）が理解されるべきだからである⁵⁾。すなわち言葉「木」が指示する木は、何が理解されるべきものであるかに応じて、事物である場合もあれば記号である場合もある。したがって、アウグスティヌスが示した事物と記号の区別は、存在するものを絶対的な仕方では区別するものではない。そうではなくて、事物と記号の区別は相関的である。教えと学びにおいて、そのとき学ばれるべきものが事物と呼ばれ、その事物を学ぶために人が使うもの⁶⁾が記号と呼ばれる。

事物と記号をこのように区別した上で、アウグスティヌスは、まず事物について論じ、後で記号について論じると言っている。このように聞くときわれわれは、事物について論じるとは、聖書の個々の表現において理解されるべきことがらそのものについて論じることか、あるいは文字通りの表現について論じることであろうと予想する。しかし実際には、そうした議論はされない。すでに指摘したように、第一巻は愛についての議論に費やされているのである。

それでは、事物について論じるとしたアウグスティヌスの意図は何か。この問いを考えると注目されるべきは、「いかなる事物でもないならば全く無であるから、全ての記号は何らかの事物でもある」とアウグスティヌスが言っていることである。この言及では、事物が存在するあらゆるものも意味することが指摘されている。すなわち、教えと学びのあり方を説明するものであって存在の絶対的な区分ではない事物と記号の概念が、ここであえて存在に関わる議論に導入されているのである。アウグスティヌスによれば、あらゆるものは事物であるから、記号もまた事物である。しかし「あらゆる事物が記号でもあるのではない」。すなわち、存在するあらゆるものは、事物にも記号にもなりうる事物と、決して記号にならない事物に二分されると考えられているのである。

このようにアウグスティヌスは、事物にも記号にもなる事物と決して記号にならない事物に分けて考えられる、存在するあらゆるもののあり方を示唆した上で、事物について論じると宣言する。そして事物について論じるときに考察されるべきは、「事物がそれ自身以外に他のものも指示するというのではなく、事物が事物であるということ」であると言う⁷⁾。ここで言われているのは、考察されるべきは、事物が他のものも指示するという、つまり事物の記号としてのあり方ではなく、事物であるということ、つまり事物の事物としてのあり方であるということである。すなわち、考察されるべきであると言われているのは特定の事物のことはない。そうではなくて、存在するあらゆるもののあり方のことである。したがって、事物について論じると言われたとき意図されているのは、存在するあらゆるもののあり方について論じることであるといえよう。

では、アウグスティヌスが示唆している、存在するあらゆるものの中でも記号にならない事物とは何か。再び、教えと学びのあり方における事物と記号の区別に注目しよう。先に述べたように、事物は教えと学びにおいて学ばれるべきものであり、記号は事物を学ぶために使われるものである。このとき事物と記号は、いわば目的と目的のために使われるものという関係にある。例えば文字通りの表現においては木が学ばれるべき目的であり、「木」は木を学ぶために使われるものである。そして比喩表現においては、まず言葉「木」を使って目的である木を理解し、さらに木を使って目的である別の何かを理解する。このように、目的と目的のために使われるものとの関係に着目して事物と記号の関係を考えると、記号にならない事物とは、目的のために使われることがない事物であり、常に目的であるもの、いわば究極の目的である。

かくして、アウグスティヌスは事物と記号を区別する議論において、目的と目的のために使われるものとの関係に着目していると思われる。そして、存在するあらゆるものは、究極の目的である事物と、目的にも目的のために使われるものにもなる事物に二分されることを示唆していると思われる。われわれはこのことを念頭におきながら、引き続き事物についての議論を検討しよう。

II 享受と使用

事物について論じると宣言された後、引き続き3章3節からは事物と記号の概念は一切言及されない。はじめに次のように言われる。

したがって、ある事物は享受されるべきものであり、ある事物は使用されるべきものであり、ある事物は享受し、使用するものである⁸⁾。

享受と使用の概念によって、事物が区分されている。そして、享受されるべき事物は「我々を幸福にするもの」、使用されるべき事物は「それによって我々は幸福を目指すことを助けられ、(享受されるべき事物に) 到達し、そこにとどまることができるようにと支えられるもの」、享受し使用する事物は我々人間であると説明される⁹⁾。一見、事物と記号の議論から急に話題が転換されたかのように思われるが¹⁰⁾、享受されるべきものと使用されるべきものは目的と目的のために使われるものの関係にある。我々人間にとって目的である事物が享受されるべき事物と呼ばれ、目的のために使われる事物が使用されるべき事物と呼ばれている。すでに事物と記号についての議論においてその区分が暗示されていた、記号にならない事物つまり究極の目的である事物が、享受されるべき事物と表現され、事物にも記号にもなりうる事物つまり目的のために使われる事物が、使用されるべき事物と表現されていると考えることができる¹¹⁾。

享受と使用の概念を用いて究極の目的である事物について説明するアウグスティヌスは、まず、我々を、そこでこそ幸福になれる祖国へと乗り物を使用して帰る旅人に喩える。そして我々はこの世で「主から離れて巡礼している¹²⁾」という聖書の言葉を引用し、祖国、すなわち享受されるべき事物は神に、使用されるべき事物はこの世に相当すると説明する。その上で、なぜ神が享受されるべき事物であるかについて詳細に論じている。アウグスティヌスは、神が享受されるべき事物であるという考えを、単なる信仰に基づく考えとして独断的な仕方では主張してはいない。そうではなくて、あらゆる事物を階層に分けて考えると、生命であり且つ不可変的である事物がもっとも優れた事物であり、それを我々は神と呼んでいるから、神のみが享受されるべき事物であると説明している。我々にとって神が究極の目的であることは、神が生命であり不可変的であるということに基づいて確かであると考えられているのである。このことは、事物と記号についての議論においてアウグスティヌスによって示唆されていた記号にならない事物が、享受と使用の議論において享受されるべき事物と表現されているというわれわれの考えを裏付けるものである。というのも、享受されるべき事物も記号にならない事物と同じく、目的と目的のために使われるものの関係にしたがって万物を分けて考えるとき究極の目的である事物だからである。

かくして、享受されるべき事物、すなわち究極の目的である事物は神であり、目的のために使用されるべき事物はこの世の事物であるという仕方では万物が二分された。ところで、われわれは事物と記号を区別する議論において、目的である事物とは教えと学びのあり方において目的である事物のことであることを確認した。学ばれるべきものが目的なのであるから、目的とは、我々がそれを学ばないし理解する目的である。したがって、究極の目的である享受されるべき事物も、我々人間がそれを理解する目的であると考えられる。じっさいアウグスティヌスは、享受と使用の議論において、享受されるべき事物である神は我々が場所において至る目的ではなく、我々の理解が至るべき目的であることを繰り返し説明している¹³⁾。では、我々が神を我々の理解が至るべき目的とし、そしてその目的のためにこの世を使用するとは、具体的にいかなることであろうか。

アウグスティヌスは、「享受するとは、ある事物にそれ自身のために愛によってとどまることであるが、使用するとは、必要になったものを愛される獲得されるべきものへと関係づけることである¹⁴⁾」と言う。この箇所では、享受と使用の概念についてこれ以上詳しく説明されていない。したがってわれわれ読者にとっては、この箇所では愛の概念が入り込むことは唐突に感じられ、疑問が生じる。しかし、第一巻後半部において、その説明と分かることが次のように言われている。

人間はその人のために人間から愛されるべきであるのか、他のもののために愛されるべきであるのかが問われる。というのも、その人のためにだとすると我々はその人を享受する。もしも他のもののためだとすると我々はその人を使用する¹⁵⁾。

あるもののためにそれを愛することが享受することであり、別のもののために愛することは使用することであると説明されている。「～のために (propter)」は、それが目的であることを表す表現である。「人を使用する」と言うが、それは人を愛さないことではない。ただ何のために愛するかという愛の目的がその人にはなく、別のものにある。また、同様の考えが、自己愛についての考察で用いられている。その考察においては、「いかなる人も自分自身を享受するべきではない。なぜならいかなる人も自分自身のために自分自身を愛するべきではなく、享受されるべきあの方のために自分自身を愛するべきだからである¹⁶⁾」と、「～を享受する」をそのまま「～のため

に～を愛する」と言い換えられている。すなわち、神を我々の理解が至るべき目的とするとは、神を神のために愛することであると理解されているのである¹⁷⁾。

さらにアウグスティヌスは、使用されるべき事物の中でも人間は愛しても愛さなくてもよい事物ではなく、愛されるべき事物であることを強調する¹⁸⁾。このことは、「人間は神の像と類似へと作られた」もので、「理性的な魂という名誉ある地位において獣より優れているという限りで、偉大な事物である」ことを根拠として説明される¹⁹⁾。理性的であるという点で動物よりも優位であるという考えは、神が享受されるべき事物であることを説明するときに持ちだされた、事物を階層に分ける考え方を前提としている。また、「神の像と類似へと作られた」という言葉は、事物のあり方そのものを作った神が語った言葉であるとアウグスティヌスがみなしている。聖書 (Gen. 1; 26) に由来する表現である。つまりアウグスティヌスは、事物のあり方に基づいて、人間と同等かそれ以上の事物は愛されるべき事物であると説明しているのである²⁰⁾。そして、人間とはいえ自分自身を愛することは命じるまでもないため²¹⁾、神と隣人を愛するべきであると主張する。

かくして、神を目的とするとは神を神のために愛することであり、神を神のために愛することは神だけを愛することではなく、神のために隣人も愛さなければならないと考えられていることが明らかになった。神を目的とすることの中に、隣人愛も含まれているのである。

III 聖書解釈と愛の概念

本稿 I 章において示されたように、アウグスティヌスは事物と記号の関係を目的と目的のために使われるものの関係によって捉えている。つまり解釈という行為を、言葉を通して目的である事物を理解し、比喩表現の場合はさらにその事物を通して最終的な目的である別の何かを理解するといった構造で捉えている。このとき、何が最終的な目的である事物かは、話者がその記号によって何を指示したかによっている。したがって、いわば答えは話者、つまり教えと学びのあり方における教える者においてある。しかし聖書においては、言葉を通して事物を理解してもそれが最終的な解釈であるのか否かは、学ぶ者にすべて分かるとは限らない。なぜなら聖書の話者は神であるから、その解釈が最終的な解釈であるとの保証がないためである。したがって聖書を解釈する行為は答えが用意された問題を解くようなものではなく、むしろ思索し続

ける行為であることになる。

ところで、目的と目的のために使われるものの関係において解釈という行為を考えると、その関係は一つの言葉とそれの指示する事物の関係だけにとどまらない。言葉の理解は句の理解を目的とし、句の理解は文の理解を目的とするといえよう。しかも、目的のために使われるものを定める根拠は目的が何であるかによっている。例えば言葉「木」を解釈するとき、文字通りの表現であるのか比喩表現であるのかは、その言葉だけでは分かりえない。アウグスティヌスが記号の例として「モーセの投げた木」という句を挙げているように、解釈者は言葉「木」の解釈を定める根拠を句に求め、文に求め、話全体に求め、ひいては話者に求める。したがって、聖書解釈において思索し続けることは、神を目的とし続けることになる。そして本稿II章で示されたように、神を目的とするということは、神と隣人を愛するということである。よって、聖書解釈という行為そのものが、神と隣人を愛することを含んでいると考えられる。

じっさい、アウグスティヌスは第一巻の結論部において、事物について論じた中でも最も重要なことは、聖書の目的（finis）は神への愛と隣人への愛であることを理解することであると述べる²²⁾。ここで言われている、聖書の目的が二つの愛であるとは、聖書を読んだ結果二つの愛の重要性を知るといったことではないであろう。そうであるとすると、いったん知ってしまえば聖書を読む必要はないということになる。そうではなくて、聖書の目的が二つの愛であるとは、我々は聖書解釈を通して神と隣人を愛するということであるといえるであろう。聖書解釈という行為が神と隣人を愛する行為を含んでいるのであるから、我々が聖書を解釈することは二つの愛を実現することになる。このように考えられて、二つの愛を実現することが聖書の目的であると言われていると思われる。また、このように聖書の目的を述べた上でアウグスティヌスは、目的が目的のために使われるもののあり方を定めることに着目して、次のように言う。

自分では聖書ないしその一部を理解したと思っているが、その理解によって神と隣人へのこうした二つの愛を建てないような人は誰であれ、まだ理解していなかったのである²³⁾。

この言及では、二つの愛が聖書解釈の正しさの基準となることが示されている。聖

書解釈という行為が神と隣人を愛する行為を含んでいるとすれば、正しく理解したと自分では思っても神と隣人を愛していなければ理解したとはいえない。言葉を理解し、文を理解し、章を理解していったときに、二つの愛に結びつかない解釈は正しくないということになる。かくして二つの愛は解釈の正しさの基準として考えられる。

では、解釈の正しさの基準となるこの二つの愛は、聖書解釈という営みにおいて具体的にいかなる仕方で実現されるのか、すなわち、いかなる行為が神と隣人を愛していることになるのか。

本書第一巻においてアウグスティヌスは、究極の目的である事物は神であることを説明する中で、何度も神の受肉について言及する²⁴⁾。神の受肉は、「(神は) 祖国でありながら、我々のために自らを祖国への道にもした²⁵⁾」ことであるとして、我々が神を目的とするあり方を、道を進む比喻で説明する。そしてその進み方は、「よい熱心さとよい生き方によって²⁶⁾」進むことだと言う。また、「よい仕方でおこない、よい生き方の定めに従うことによって、愛するものへ自分が到達するであろうことを希望することもできる²⁷⁾」とも言っている。すなわちアウグスティヌスは、我々の生き方が道を進むあり方であると考えているのである。そしてその道は受肉した神つまりキリストであるのだから、道を生き方において進むことは、キリストの生き方を模倣することであると考えていると思われる。そのキリストの生き方が書いてある書物こそが聖書であるから、聖書解釈の営みにおいて神を愛することが実現しうるといえる。

また、本稿II章でも確認されたように、隣人を愛することは正確に表現すると、神のために隣人を愛することであって、隣人を使用することである。享受と使用の定義において、使用するとは「必要になったものを愛され獲得されるべきものへと関係づけることである」と言われていた。愛され獲得されるべきものへと関係づけるとは、目的のために使うということである。目的のために使うことは、目的に到達すれば不必要になることを意味しないと思われる²⁸⁾。そうではなくて、アウグスティヌスは、使用の対象も自らとともに神へ到達することを自らが目的に至るあり方に含めている。じっさい、「我々は、すべての人が我々と共に神を愛するように望まなければならない。そして我々が彼らを助けるにしろ彼らによって助けられるにしろ、そうした全体があつた唯一の目的へと関係づけられるべきである²⁹⁾」と述べている。アウグスティヌスは、自分だけが目的である神へ到達すればよいと考えているのではないのである。こうした考えに基づいて、彼は聖書解釈においても、自分が聖書を理解するばかりで

なく他の人に教えることに積極的な意義を認めているのであると思われる³⁰⁾。理解されるべきことを見出す方法だけでなく理解したことを説明する方法も聖書解釈であるとみなし、本書第四巻を説明する方法を論じる議論に充てていることも、こうした考えに基づいてなされていると考えられる。かくして、理解したことを説明するという聖書解釈の営みにおいて、隣人を愛することが実現しようとアウグスティヌスは考えているといえよう。しかも、この説明するという行為は一方的なものではないであろう。というのも、最終的な解釈が定められないという聖書解釈の性質は、神を愛し隣人を愛することがこの世では完了しないことを帰結する。理解が完成することはないのであるから、他人の解釈を受け入れ、解釈を教え合うというあり方を生む。こうした、人間が相互に関わり合うあり方において、聖書解釈における隣人愛の実現をみることができると思われる。

以上のように、本著作第一巻においてアウグスティヌスは、目的と目的のために使われるものの関係に着目することによって、聖書解釈という営みそのものがじっさいに神と隣人を愛する行為となることを説明している。すなわち、聖書解釈という行為そのものに、至福の生へ至るあり方を見出しているのである³¹⁾。自分だけが言葉を正しく理解して至福の生へ至ればよいというのではなく、言葉を介して人と人が相互に関係するあり方を重要視している点に、アウグスティヌス独自の視点があるといえるだろう。

注

- 1) 『キリスト教の教え』は396年、『告白』は397年に書き始められている。『再考録』で言われているように第三巻の途中で一旦執筆は中断された。完成されたのは426年になってからである。(Retr., 2, 4.)
- 2) *De doc. chr.*, 1, 2, 2. “omnis doctrina vel rerum est vel signorum, sed res per signa discuntur.” アウグスティヌスは初期著作 *De magistro* において、語ることは「教える (docere)」ためであるとした上で事物と記号を対比させ、教えと学びのあり方について論じた。*De doc. chr.*, 1, 2, 2. も事物と記号を対比させて論じる議論であるから、この *doctrina* は *De mag.* にある *docere* を名詞化したものであるとみなすのが妥当であって、ここでキリストの教えやキリスト教文化などと限定させるべきではない。omnis を加え、「およそ教えは」という表現であることもその証拠である。この *doctrina* についての先行する諸解釈については、G. A. Press, “The Subject and scripture of Augustin’s *De Doctrina Christiana*”, *Augustinian studies*, 11, 1980, pp. 99-124 において比較検討

されている。

- 3) *De mag.* に見られる、「最高の教師（キリスト）は言葉を教えたのではなく、言葉によって事物そのものを教えた」（1, 2.）といった発言は、教えを事物と記号に属するものに分け、記号を通して事物を学ぶとするこの *De doc. chr.* の議論につながるものである。
- 4) *De doc. chr.* 1, 2, 2. “res quae non ad significandum aliquid adhibentur” “res quae ad significandum aliquid adhibentur”
- 5) 同様の表現についての説明が *De doc. chr.* 第二巻にある。dicimus bovem et per has duas syllabas intellegimus pecus quod isto nomine appllavi solet, sed rursus per illud intellegimus evangelistam (2, 10, 15.) 言葉「牛」から端的に福音記者を理解するのではなく、まず牛を理解し、さらに福音宣教師を理解するという仕方と考えられていることが分かる。
- 6) 記号が使用の対象であることは、“sunt autem alia signa quorum omnis usus in significando est, sicuti sunt verba” (1, 2, 2.), “nemo enim utitur verbis nisi aliquid significandi gratia” (同), “res quae ad significandum aliquid adhibentur” (同) といった表現に表れている。これらの表現では記号は教える者が使用する対象であるが、教えと学びのあり方においては、教える者にも学ぶ者にも学ばれるべき事物は共通しており、学ぶ者がその事物を理解するに至るためのものがその事物を指示する記号であることも共通しているから、学ぶ者にとっても記号は使用の対象であるといえる。
- 7) *De doc. chr.*, 1, 2, 2. id nunc in rebus considerandum esse quod sunt, non quod aliud etiam praeter se ipsas significant.
- 8) *Ibid.*, 1, 3, 3. Res ergo aliae sunt quibus fruendum est, aliae quibus utendum, aliae quae fruuntur et utuntur. 「享受し使用する事物」を「享受もされるし使用もされる事物」とする訳が複数ある。(O'Connor, D. W. Robertson Jr. ら.) これは誤訳である。「享受し使用する事物」は享受し使用する主体のことであって、事物を三分する三つ目のカテゴリーではない。
- 9) *Ibid.*, 1, 3, 3. “Illae quibus fruendum est nos beatos faciunt; istis quibus utendum est tendentes ad beatitudinem adiuvamur et quasi adminiculamur, ut ad illas quae nos beatos faciunt pervenire atque his inhaerere possimus. Nos vero, qui fruimur et utimur inter utrasque constitute,”
- 10) 3章3節以降は聖書の内容についての話題に転じているといった解釈など、先行研究において諸々の解釈がなされている箇所である。例えば W. S. Babcock, T. Toomらは、究極の res とは聖書の内容のことであり、それが二つの愛であるとしている。本稿の以下の議論で論じるように、二つの愛は究極の res である神を旨指す仕方であるのであって、愛することそのものが我々の究極の目的ではない。本節以降は議論が聖書の内容あるいは倫理的内容に限定されているといった解釈には反対したい。(W. S. Bab-

cock, Caritas and signification in *De doctrina christiana* 1-3, in: *De doctrina Christiana, A Classic of Western Culture*, ed. by Duane W. H. Arnold and Pamela Bright, Notre Dame-London, University of Notre Dame Press, 1995, pp. 145-163; Tarmo Toom, *Thought Clothed With Sound: Augustine's Christological Hermeneutics in De doctrina Christiana*, Peter Lang, Bern, 2002)

- 11) じっさい、記号が「使用」の対象であることはすでに言及されていた（注6参照）し、享受と使用についての議論が「したがって (ergo)」という接続詞で始められていることも、享受と使用の議論は記号にならない事物と記号にも事物にもなる事物の区別をひきつぐものであることを示す証拠である。
- 12) II Cor., 5, 6.
- 13) *De doc. chr.*, 1, 4, 4; 8, 8; 17, 16.
- 14) *Ibid.*, 1, 4, 4. *Frui est enim amore inhaerere aliqui rei propter se ipsam; uti autem, quod in usum venerit ad id quod amas obitinendum referre, si tamen amandum est.*
- 15) *Ibid.*, 1, 22, 20. *quaeritur utrum propter se homo ab homine diligendus sit an propter aliud, utimur eo.*
- 16) *Ibid.*, 1, 22, 21. *Sed nec se ipso quisquam frui debet, …quia nec se ipsum debet propter se ipsum diligere, sed propter illum quo fruendum est.*
- 17) 先に確認したように、神は学ぶないし理解する目的である。その目的の目指し方が愛することであると言われている。知的な営みと愛の概念がアウグスティヌスにおいて密接に関係していることが分かる。
- 18) *Ibid.*, 1, 23, 22.
- 19) *Ibid.*, 1, 22, 20.
- 20) このように万物を区別する仕方の説明していることは、アウグスティヌスが事物について論じるとしたことが、聖書の目的を論じるのではなく、万物のあり方について論じていることを裏付ける。
- 21) *De doc. chr.*, 1, 26, 27.
- 22) *Ibid.*, 1, 35, 39. *Omnium igitur quae dicta sunt ex quo de rebus tractamus haec summa est, ut intellegatur legis et omnium divinarum scripturarum plenitude et finis esse dilectio rei qua fruendum est et rei quae nobiscum ea re frui potest, quia ut se quisque diligat praecepto non opus est.*
- 23) *Ibid.*, 1, 36, 40.
- 24) *Ibid.*, 1, 11, 11; 8, 13; 34, 38.
- 25) *Ibid.*, 1, 11, 11.
- 26) *Ibid.*, 1, 10, 10.
- 27) *Ibid.*, 1, 37, 41.
- 28) W. R. O'Connor は、“usus”の第一義が joyful unity であることを挙げて、使用する

ることの道具的な意味は派生的なものにすぎず、アウグスティヌスの愛においては、人は隣人の永遠の生のために終末の目的に隣人を含むから、純粋な道徳的使用はないとして、アウグスティヌスの愛は自己中心的であるとする K. Holl, A. Nygren らの主張を退けている。(The uti/frui distinction in Augustin's ethics, *Augustinian studies*, 14, 1983, pp. 45-62)

29) *Ibid.*, 1, 29, 30.

30) 他の人々に説明することが必要であることは、*De noc. chr.* 序論において繰り返し論じられている。

31) 多くの聖書解釈書を残した彼が、解釈の営みそのものにこのような意義を見出していることは注目されるべきである。じっさい、本稿でも言及したように、創世記解釈が付された『告白』が書かれたのは本著作とほぼ同時期である。本著作は、一部の読者に向けた実践的な聖書解釈のための手引書であるというだけでなく、本稿で明らかにしたように、人が言葉を介して神や人と関係するあり方を論じた書として捉えられるべきであると考えられる。